

其の女が言ふ。

此の前の女とは色が白くて、顔立が違つてゐる。

『あなたは出石寺や八幡濱を御存事ですか』と問ふと『名前丈は聞いた事があります』と言ふ。
『此のはがきを無想庵が歸つたら渡してくれませんか、此の繪葉書はあなたに上げますから』

僕の心には安定がなくなつて了つた。

どうして此んな娘が無想庵のところ居たのか、しかも的の蔭から現はれて、放たれた征矢は
モンドリ打つて折れて宙に迷つた。

櫻に鶯木が迷ふと童謡にもある。

『それぢや此の前の女の人は十八ではないのですか』

『エ、あれは女中さんです、私より一つ下で十七です』と言ふ。

變化は價值だ、價值はダ、イストだと書いた事がある。

あまりに價值にとらはれ過ぎた言葉だ。

價值はやつぱり距離の問題だと僕は思ふ。